

大和川をめぐる地域文化

岩井宏實

- 一 大和川
- 二 亀ノ瀬と魚梁船
- 三 魚梁船の支配
- 四 剣先船と魚梁船

- 五 大和の綿作
- 六 大和の綿織物業
- 七 河内の綿作

論文要旨

大和川は大和初瀬の溪谷に源流を発し、大和川に流れ込む多くの支流を集め、大和盆地を横断して西流し、大阪湾に注ぐ大動脈である。河内側に流れ込むとまた多くの支流をもって北流していた。この大和川は大和側・河内側それぞれに物資輸送の幹線の役割を果たしていたが、大和と河内の境に位置する亀ノ瀬は岩石重畳とした難所であったため、上流と下流が隔絶した状況にあった。

ところが慶長年間、片桐且元の大和の所領からの年貢米輸送の必要から、亀ノ瀬開墾がおこなわれ、ここに大和側・河内側が一貫することになり、大和川の通船の支配を竜田明神の神人安村喜右衛門が支配することになり、大和川は魚梁船、河内側は剣先船がそれぞれ亀ノ瀬で連結して一大物資流通路となった。

その結果、大和においても俵本（田原本）をはじめ随所に物資の集散地が

でき、俵本などは「大和の大坂」と称されるほどになった。そして大和側からは米や雑穀を河内側に送り、河内側からは干鰯をはじめとする肥料が大量に大和側に送られた。それによって大和の綿作が栄え、大和木綿を特産として産するようになった。

一方また宝永元年の大和川付替の大事業により、大和川が真直に西流して大河となったが、そのため従来の支流周辺地帯は干田化する状況を呈し、潰地も生じた。そこが大々的に開発され、多く綿作がおこなわれ、いわゆる河内木綿がいつそう隆盛したのであった。

こうして大和川という河川をめぐる広域地域が綿作を中心とする文化地域を形成したのである。そうした歴史的環境の形成と変遷ならびに生活文化の様相を考察しようとするものである。